

ホーム・ルーム活動における
生徒の自主性

合同ホーム・ルームの実施とその問題点

貝 沼 喜 兵

1. は し が き

発表者は、昭和40年度高校1-4の担任になり、現在引き続いて高校2-4の担任としてホーム・ルームの指導に当たっている。当初、ホーム・ルーム活動（以下ホーム・ルームということにする）の指導目標を生徒の主体性の確立と責任感を養うため、可能なかぎり生徒の自主的な活動を盛りたてるようにした。この目標を実現するためにプランをつくり、これを生徒に話し、クラス討議にかけ、次のような要領で行動プランを具体化することにした。

クラスを機械的に班に分け、各班で班長を互選する。各班は班長を中心に会議を開いて、興味を持っているテーマをいくつか選ぶ。班長会議でこのプランを調整し、クラス会議で各班のプランを承認する。各班は年間において数時間のホーム・ルームの時間（時に必要において放課後、あるいは休日等をも利用することを含めて）を分担し、それぞれのテーマについて、班員だけの活動でなく、クラス全員が活動できるように、ホーム・ルームの事前の準備、具体的ホーム・ルームの展開、事後の反省、それを土台にした次回の準備等をする。いわば各班は従来ホーム・ルーム活動においては固定する傾向にあるリーダーを分散し、ひいてはホーム・ルームの推進母体となる点にその狙いがあった。話しあいを重ね、慎重に検討して大体5月下旬頃、各班は次のようなテーマを決定した。

班 名	活動のテーマ又は目標
1 班	月に1度スポーツ大会を行なう。学校生活における問題点をあげその解決にあたる。
2 班	近代史の研究、当世の学生の考え方（討論会）
3 班	女子校との交流（合同ホーム・ルーム）、芸術について（討論会）
4 班	ハイキング、他校の生活意識調査
5 班	映画鑑賞

以上まとめた計画はさっそく実施にうつされたが、生徒会の活動、特に音楽祭、文化祭の準備等で1部の班で実施できないものもあった。これらの各班のプランの中で3班のたてた女子校との交流は、お茶の水女子大附属高校1年梅組と7月～翌年3月までの間に4回継続して実施された。この活動は、生徒の手によって計画され、その準備、合同ホーム・ルームの実施、事後の反省、その反省に基づいて次回の準備と一連の活動が生徒の手によって自主的に実行された。このことは他のホーム・ルームを刺激してかなりのクラスにおいてその実施の可否が検討され、4組以外でも数クラスが実施に踏み切った。

このような合同ホーム・ルームについて学校としてどうみているかについてふれてみる。現在附属駒場は中学から高校まで男子の学校であり、将来においても、共学にする計画は持っていない。しかし、青年期の男子だけの学校においては、共学校に比較して女子に対して偏見を持ったリ、逆に偶像視したりする生徒が多い傾向がある。そして経験的に日常の学校生活で女性に対する理解が困難である。これを合同ホーム・ルームという機会を通じて異性を観察し、理解し、その無用な偏見をとり去るのは必要なことである。

また、高校段階までは、個人対個人という交際による理解ではなく、集団的なつきあいの過程において異性を理解させる方針で男女間の問題を指導することになっている。

しかし、実施についてはいろいろと問題もあり、特に他校をわずらわすことになり、うかつには出来ない。そこで1年4組（以下1-4とする）の合同ホーム・ルームをテストケースとしてその成り行きを観察し、出た結果を検討して他のクラスにもすすめていこうという態度をとっていた。いわばテストケースとして1-4の合同ホーム・ルームをみていた。

4回の合同ホーム・ルームについての概要は生徒の手によって報告書としてまとめられた。発表者はホーム・ルーム委員会の承認を得て、この機会を利用して、生徒の自主的な活動の1事例として、合同ホーム・ルームについて報告する。特に、この活動は、(1)生徒によってどのように提案されたか。(2)どのような経過で会は行なわれたか。(3)この活動に対して生徒はどのような感想を持ち又どのような批判を行っていたか。(4)このような活動を実施するにはどのような問題があるか(特に生徒の側に)又どのようにそれは解決さるべきであるか。(5)この合同ホーム・ルームについて担任はどのような指導を行なったか。等について、生徒のまとめた報告書を中心に、これに合同ホーム・ルームの記録集から集録した資料(1)、(2)およびを併せて発表する。

2. 報 告 書

(1) 合同ホーム・ルームの提案者として

中 村 英

僕が合同H・Rの提案者です。そこで、どうしてこれを提案したのか、その理由を書くことになりました。提案してもう一年たった今になっては、考えれば考えるほど色々な失敗が思いだされ、はずかしい気持です。しかし、この合同H・Rの記録を残すのですから正確でありたいと思いました。提案した当時の卒直な気持を書いたつもりです。

今迄、誰にも話していないことですが、僕が合同H・Rを提案するには、その頃の読書が影響していました。それは、一般に「女性論」といわれる本です。家族制度と女性の地位の問題、現体制における女性の職業の問題等々、大変興味深く読んだのです。そこで僕が、同年輩の女性はこの問題をどう考えているのだろう、と思ったのは自然だったと思います。又これらの本を読む前の僕の女性観がまちがっていたように思えました。そんな時、クラスに目を向けると、級友の多くが以前の僕のようなあやまりをしているのじゃないか、とも思えました。つまり、本の影響による僕個人の希望といったものが一因としてあったわけです。

又、もう一方、クラスの活動を活発にするためにも、クラスの多くの人の希望にそった活動が必要だと思われました。当時僕は学級代表でもあったので、特にそんな気持が強かったようですし、合同H・Rは皆の要求にもとづいているように思えました。

以上のような二つの面から提案したわけです。

もうここまで読んだ人は気づいたでしょう。この文章の中でさえ合同H・Rの目的がはっきりしていないということ。「又、もう一方……」以下で用いている合同H・Rがもうそれ以前に書いた合同H・Rとは性質がちがっているなど目的があいまいであったようです。又合同H・Rを本当にクラスの多くが希望していたのか、希望するとしたらどんな面を考えていたのか等々、当然わかっているなければならない基礎的なことがはっきりしていなかったようです。つけたして言うておきますと、合同H・Rに関する話し合いが「やる、ということ」を前提として進められたようで、提案者として責任を感じています。

(2) 経 過 報 告

藤 井 純・志 賀 充・林 乙 平

経過は流れをつかめば良いので簡単に

1回目 1969年7月15日(木) 13:30~16:00

お茶の水女子大学附属高等学校において

準備 とにかく両校にとって初めての試みですので、お互いに勝手がわからず、事前協議は2回行なわれただけで7月15日に第1回が開かれることになった。そこに到るまでの過程を述べてみよう。

我々クラスはご承知の通り、5班に分かれてH・R活動を行っていた。年間計画作成の

さい、3班から一つの案として「女子校との交流」という実現不可能と思われる提案がなされた。そして、相手校とやり方について班員で話し合った結果、相手校としては数校候補が上がり、結局、国立の附属で学校の性格も似ているのではないかということで、お茶の水女子大学附属高等学校が選ばれた。しかし、やり方については十分な話し合いも行なわれないうまま、H・Rにかけられ、大多数の賛成を得てH・R年間計画の一環として活動にはいることになった。班において決定された時には適当に楽しみながら、しだいに高度な話し合いにもっていかうという感じが強かった。担任の貝沼先生に相談し、さっそく交渉に移ったが、その経過については、後に先生に述べて頂くとして、開催が決定してからは、提案者である中村君と班長であった僕がお茶大附属のH・R代表と話を進めていった。事前協議が6月下旬に行なわれ、開催月日、進行、班編成などが決められた。班はH・R活動を行っていた班で分け、座長を一人選んで、潤滑油的存在になってもらうことになった。話し合いのテーマは指定しておかず、話し合い途中で皆の興味あるものがでてきたのなら、それについて話し合ってもらい、そのあたりは座長に任せる事とした。事前協議の段階において「進行」の問題でくい違いがみられた。こちらとしては和らいだ雰囲気 のうちに進めていきたいと思い、フォークダンス、コーラス、スポーツなりをしてから話し合いにはいろうと提案したが、フォークダンスがあちらにカチンときたらしく、猛烈な反対にあって、この誤解が最後まで長く尾を引いた。駒場側にも、提案に対して反対するような意見があったことがわかったが、ここではまだ出て来ていなかった。

- 当日 I 開会の言葉 中村 英
 II 先生から一言 貝沼先生(駒場1の4担任)
 〃 片木先生(お茶大付1の梅組担任)
 III 各班に分かれての話し合い
 IV 全体で報告および反省会
 V コーラス交換
 VI 班長の反省会

といった段取りで進んだ。相手に聞きとれないような、ボソボソとした自己紹介で始まり、約2時間程話し合った。その内容は、各班ともほぼ同じで、良妻賢母とは、女子の職業、男女平等といった内容、初対面のせいとお互いに固くなっているのに加えて、何となく内容が固苦しいので、一部の人を除いては大変おとなしく、お見合いムードというか沈黙がしばらく続く事もたびたびあった。この後再び全員集まって、コーラスの交換を行なって解散、陰ではコーラスによってやっと雰囲気が和らいだというような声も聞かれた。

反省 初回とはいえ、満足できる結果ではなかった。連絡が不徹底で、進行もスムーズではなかった。あそこまで多くの時間とお金をかけていたのに、話し合いの時間が少なすぎるという声もあった。

当日、終了後に行なわれた反省会議によって出された反省は、

- 話す人が限られていた。
- 内容が硬く、駒場の生徒が難解な言葉を使用し過ぎる。
- お互いに恥ずかしがって、声も小さく、聞きとりにくかった。
- 準備不足、特にテーマをきめていなかったので話の糸口を見出すのに時間をとりすぎた。(テーマ・進行)

2回目 1965年11月20日(土) 13:30~19:00

準備 第1回の反省も十分行なわれないうまま、ウヤムヤのうちに、お茶大付高が忙しい上に、そ

れほどやりたいという意欲もないということなので、いちおう1回で打ち切りにしたいという意向もあったがせっかく苦労してここまでもってきたのと、悪い前例を後輩の為にも残したくないということから、再び申し込んだ。そのあたり、お茶大付高の態度がはっきりせず、非常に交渉しづらかった。こんどは、前回の失敗をくりかえさないようにというので第1回の反省をもとに、テーマ別に班を分け、班編成に力をいれた。テーマは流行、男女の差、将来の仕事など、それを話のキッカケとする班と、それで最後まで通す班とに分かれた。ここにおいて「合同H・Rの意義、目的は何んだ」という疑問が出され、意見が戦わされたが、結局、「男女の相互理解」という無難な言葉でまとめられた。意義などいまださら考える必要はない。やっていくうちに見出しせるといった意見もあったが、僕としては、第1回が行なわれる前に討論されるべきであったと実行委員として反省している。

当日 駒場の文化祭後の余波かどうかわからぬが、比較的、皆意欲的であったので、盛り上がりが見られた。8つの班が5室に分かれて前回と同様に自己紹介から始まって一部の班を除いては、なごやかな雰囲気の中に話が進んだ。話す内容が、あらかじめ指定されていたが、それをキッカケにして話を進めていくという班が多かったので、自然と、題は「学校生活」や「将来」に関する事に移っていたようである。話し合いが終了後音楽室で、30分程コーラスを行なって5時頃解散した。

反省 なごやかな雰囲気ではあったが、内容が浅いという声が聞かれたり、あのようなものであったらいつそのことやめてしまおう。あれでは行なう価値はないというような意見も出てきた。しかし、より上の段階へのステップの素地はできたと思う。

ここで、実行委員を、志賀、林君へと交代した。(以上文責藤井)

3回目 1966年1月29日(土) 14:00~17:00

準備 〇 どういうふうに班編成をするか。

これは、前回、班の中の反省で、もっと深く話し合いたい、というのと、しゃべりにくいので最初は軽いものからにしたいというのが出て、これがうまく話し合いが運ばれなかった一つの原因と考えたので班分けをこの二つの種類に分けることにした。又、今度で3回目だが、いつも班を変えるので、せっかく本来の目的の意義ある話し合いをするための雰囲気を作っても、それがむだになってしまう。それで、3回、4回は班変えをしないことを前提として行なわれた。

〇 実施前の雰囲気としてはやる気がないのが目立った。

1回目は初めてということ、2回目は文化祭の後ということで興味本位的要素はあるにしろ、ある程度、気分が盛り上がったが、今度は、1、2回目のやった成果に対する評価が分れて、又興味を失なった者もいたりなどで、一番活気がなかったのだと思う。

当日 ほとんどの班が一つの部屋に入ってやったので、うるさかった。進行状態はいつもの通り、話題がないらしくいきづまっていた所が多く、悪かった。話し合った内容は「教育」「学校生活」などのように自分たちに身近なものが多かった。しかも一つのテーマについて討論できた班はなかったようである。

反省 テーマについての準備不足が目立った。

一つの部屋でやったので(一部を除いては)うるさく、気が散ったり、相手の言っていることが聞こえなかったりした。

〇 その他、反省会は、今回は二回続けてやるということなので第4回目が終わってその成果がわかってからやることにした。

4回目 1966年3月18日(金) 13:30~16:00

準備 ○ 班長会議を事前に行なって、話し合いのテーマを決めた。

○ 部屋割については前回の反省に基づいて、他班の雑音が入らないように1部屋に2～3班とした。

話し合いの雰囲気は割によく、第2回目程度の盛り上がりはあった。理由として、今回が最後の合同ホーム・ルームであるということ、事前にテーマを決めていたので、皆勉強してきたことなどで討論に深まりをみせたこと、第3回と同じ班の構成であったこと、等が考えられる。

当日 前回と同じ班編成で、テーマをあらかじめきめていた。例えば、漱石の「こころ」の読後感についてとか、毎日新聞連載の「女子学生亡国論」についての感想等がその主なものであった。

反省 部屋割、テーマ等について異論はなかった。このような形態のホーム・ルームでは第4回のような方法が、最良と思われる。すなわち、班の構成は8人程度、2回程度は継続する。1回目では皆を知り合い、基礎的な討論をして、次回のテーマを決める。そのテーマについて、勉強しておいて、その意見を発表して相互の理解をはかることである。

(3) 合同ホーム・ルームに対するみんなの感想

—アンケートの集約より—

志賀 充・林 乙平

A 実施前の印象

	附 駒 場	お茶大附
やるべきでない (意義を認めない)	25%	25 %
興味本位 ①	25	12.5
やってもよい 偏見の是正 (異性の考え方がわかる)	25	50
その他 ②	25	12.5

(注) ① ここで興味本位とは、消極的な意味での「とにかくやってみよう」といった安易な気持をも含む。又やってみなければわからないという気持もある。

② 討議する機会をもつ。ホーム・ルームへの還元のため。視野を広くする、など。

B 実施後の感想

	附 駒 場	お茶大附
面白くなかった (意義は認められない) ①	50%	25%
偏見の是正ができた (異性の考え方がわかった) ②	25	30
やってよかった なんらかの意義があった ③	13	30
その他 ④	12	15

(注) ① 意義なしとする理由として、

(ア) 同じクラスメートの中ですら得られない理解を異性に求めても無理だ。

(イ) あまりにも相手 (異性) の意見が違っている。

(ウ) 男子の生徒に圧倒されて自由に自分の考えが話せなかった。

(エ) 単なる興味本位であり、相互理解は表面上の理由であった。

(オ) あたりさわりのない意見の交換であり、ほんとうに話したいことはあのような場では出せない。など。

② 偏見の是正ができたとする理由として

(ア) お互の偶像の破壊。

- (イ) 男子は女子があまり考えていない問題に深く考えていることがわかった。
- (ウ) 男子は普段の話題も考え方も私達と大分違うことがわかった。
- (エ) 男子から刺激を受けた。
- (オ) 女子の中にも政治問題について関心を持つものがあることがわかった。
- ③ なんらかの意義があったとする理由については、
 - (ア) 一つの問題について深く考える習慣ができた。
 - (イ) 自分の考えをまとめて発表する訓練になった。
 - (ウ) 経験として将来きっと何かの役に立つ。
 - (エ) 何かを得るには、自分から進んで努力しなければ何も得ることができないことがわかった。
- ④ 主としてクラスへの合同ホーム・ルームの好影響を挙げている。
 - (ア) クラスで合同ホーム・ルームを年間継続し得たことは貴重だ。
 - (イ) ホーム・ルームにおいてつの問題について熱心に討議する習慣ができた。
 - (ウ) ホーム・ルームの活動を刺激する効果があった。

C 合同ホーム・ルームへの注文（批判、感じたこと）

a 目的方法について

（駒 場）

- いろいろな活動をやり、打解けた雰囲気を作ることが大切である。（多）
- 各クラスで十分に討論を行ない、やるのならばはっきりとした態度である。（多）
- 希望参加にすべきだ。
- 委員の打ち合わせを皆によく知らせる。
- H・Rに還元できる形であるべきだ。
- 一対一で話し合いをした方がよい。
- （より完全な相互理解ができ、遊び半分にならない）
- 回数をふやし種々の試みをする。

（お茶の水）

- いろいろな活動によって打解けることが必要。
- 最初に合同H・Rをやる目的をはっきりさせる。
- 希望参加にすべきだ。
- 皆が一つの話題について話し合った方がよい。
- 回数が少ない。
- 全員で話し合う機会が欲しかった。（多）

(b) 会の具体的な持ち方について

◎ メンバー

- 同じメンバーで通す（多）
 - 打ち解けられて、深く意見を交換できる。
 - まとまりがつく。
 - 合同H・Rの会合以外に交流を行なった方が良く、その為にも
- メンバー毎回変える（少）
 - 同じメンバーだと意見が偏る。
 - 一部の班がうまくいっても全体としてスムーズにいかない。

◎ 人 数

- 今まで位でよい（4～5人）（多）

- もっと少なくてよい(3~4人)(中)
- もっと多くてよい(5~8人)(少)
- その他
- (いつも変える……マンネリ化を防ぐ為, など)
- ◎ 駒場 対一対一を希望するものが少数いた。
- ◎ { お茶の水 全員で話し合う機会があってもよかったのではないかというのが多数いた。
- ◎ 全体の傾向として駒場は少数(3~4人), お茶の水は多数(5~8人)を希望しているようだ。
- ◎ 部屋割り
 - 一室につき, 多すぎた(多) { ◦一室一班 (駒場)
 - 一室一・二班(お茶の水)
 - (注) 傾向として他のグループの話し声が気になって話し合いのムードが盛りあがらないということ
 - 丁度よい, 一室に全部入れるべき(微少)
- ◎ 場所
 - 駒場でやりたかった※ { (多) ……両校を通じて多数
 - 教室だけでなく(校内を散歩したりすることも含めて) ……(中) ……駒場
 - ※ 学校の方針で, できなかったのだからやむを得ない。しかしこれだけの希望があるのだから, 学校側(お茶の水)では考える余地があるのではないか。
- ◎ 時間
 - 丁度よい(多)(土曜日の午後時間位)
 - やや足りない(少) ……駒場
 - 長すぎた(少) ……お茶の水
- ◎ 予定通りに始め, 終わって欲しいという人が多数いた。

(4) 合同ホーム・ルームの問題点, 解決策 志賀 充・林 乙平

1. 合同H・Rは何のためにあるのか(目的論)。
 - あり方として, 二通りの場合が考えられる。
 - { a 交歓会(リクリエーションを中心にした)。
 - { b 話し合い(相互理解に重点をおいた)。
 - aの場合なら, 楽しい雰囲気を作り, それによって各人が楽しむことに意義がある。
 - bの場合には
 - 環境の異なるいろいろな人の意見を聞き, 又自分が意見を発表することにより, 自分の考え方に何らかの反省のキッカケを与えるし, 深く考える習慣ができる。
 - 自分達のH・Rに何らかの還元をする(刺激作用)。
2. 具体的な進め方(方針実行の仕方 etc) 具体的な合同ホーム・ルームの持ち方
 - (1) 交歓会か話し合いの会かどちらにするかはっきりさせる。
 - △ 僕達の場合, (両校の間でこの点の受けとり方に微妙な差があった。)
 - (2) 相手校の決定
 - ①のことを明示して申し込む。
 - 相手校との距離, 相手校の合同H・Rに対する理解・意義から考えて相手校として適

当かどうか、などを考えて申し込む。

(3) 具体的方針の決定（何を目的としてやるかということ）

- 交歓会の場合は「親善のため」というようなもの
- 話し合いの場合には、上記のようなことのうち、よく打ち合せた結果皆が最も関心の高いテーマについて
- どちらにしても、それを最も効果的に達成する方法を考える。
- 各自は全体の統制を乱さない限り、ある程度自分なりの目的を持ってよいと思われる。

△ 僕達は、「相互理解」「偏見の是正」という方針をもって進めたが、これは十分に討論をしたものでなく、方法もよく検討されたとは思われない。又最後まで抽象的であるという声があった。

(4) やり方の決定（細かな会の持ち方）

① 班単位か全体か（又は二つ位に分けるか）などを決める。

(2) 目標の回数

③ 希望参加か否か

これは意外に大きい問題で、どちらとも言えないが、H・Rの一環として行なう（還元する、しないは別として）

以上、全員参加が本来の姿と思う、いずれにせよ、よく話し合っ始めて始めに徹底させる必要がある。

④ その他必要なものを決める。

△ 例えば、委員会の他に班長会、報告会、反省会などをもっと回数多く実施すべきであった。

⑤ その他、細かいこと（場所、時間など）は、そのつど決める。

- これ等のことを、事前に両校でよく話し合い、納得のいくようにする。
- 終わったら両校で十分に反省し、次回へ生かすようにする。最終的には報告書を作成する。
- 委員は、H・Rの意見をよく反映させるように決め、又決まったことは確実に知らせる。

△ 僕達の場合、H・Rの中に合同H・Rに対して無関心のものも多く、委員が独断になってしまい、H・Rの意向と少しずれる傾向のあったことを反省する。

(5) いずれにせよ

- ◎ よく話し合う（目的、実施するしかないか、話し合いのテーマを何にするかなど）
- ◎ よく反省する（H・Rの非協力、前回の失敗の原因を次回に生かすなど）
- ◎ 両校及び委員と一般生徒との意志の疏通を十分に行なう。

△ 僕達の場合、これらのことが十分に行なわれていなかったとするもの多かった、大きな原因だと思う。

(5) 合同ホーム・ルームについて

片木 清（お茶の水女子大付属
1年梅組 担任）

1. 合同ホーム・ルームについて

最初、駒場より申出のあったのは指導部の森本先生や大和田先生を通じてであり、はじめ趣旨がよく分らなかったし、単なる社交的な集い以上の積極的理由がなさそうであったので私はかなり消極的でした。

貝沼先生にお会いしても駒場高校だけの必要性が強かったようだし、うちの生徒は男子生徒と話し合えなければならぬ必要性はあまり強くなさそうだったので、私が積極的に始めなければならぬという心配から出発したのではないのです。しかしまた反対する理由もないし、まず実験的にやってみて効果があれば続けるし、効果がなければ中止してもかまわないではないかと考えて、教官会議の承認を得た訳です。ですから私の方針では一回終わる毎にH・Rで反省し、更に続けていくことに多数が賛成すれば続けてもよいが、賛成が少数であれば何日でも中止するという程のつもりでした。

第一回が終わった後のホームルームでは続行に対する熱意があまり見られなかったようなのに、そのうちに積極的意見がまた多くなったのはどうしてでしょう。こういうことはかなりその場その場のムードや、一部の人の熱意に動かされやすいものなのでしょう。だから継続的続行ということについての多数決は、これは私がH・Rに欠席した時、決めたのかと一寸記憶がありません。私には意外であったし、またどちらかといえば不本意なことでした。しかし曲りなりにも級の多数決でその意義を認め、三月まで続けていこうと多数意見に賛成がなされたのですから、私も反対する必要もなく前に述べた実験的精神というこの学校に欠けているものを補う意味においても、私はこのような生徒側の積極性にこの頃は拍手を送りたい気持ちになってきました。ただ正直いってその日は私の研究日程上どうしても大切な時間が重なり、遂にその積極的態度をこの眼でみとどけないで終わったのは残念であり、また生徒諸君に対しても申し訳なく思っています。

合同ホームルームの教官会議への反応ということですが、これは一言で全体を尽せば傍観ということでしょう。というのは、この年の生徒指導の方針や計画という学校の立場から、この企てに承認を与えたというものでなく、したがってこの企ての結果を生徒指導面へ活用するという程の積極的意図があったわけではありませんから。また、いつか話したようにこの学校では新しい試みは何事でもあまり歓迎されない、ことに男の生徒との交流より生ずる若干の懸念や煩わしさ等があったし、また途中で後片付けの不備が起こったりして若干の先生方にはあまり心よく思われなかったかもしれません。

最後にこの試みをこれからどう活かすかということについて私の意見を述べましょう。大切なことは合同ホームルームの企ては一年梅組という特定の集団と駒場高校の一年四組という特定の集団との間の私的なつながりであったのではないということに反省する事です。大きくいえば両校がそれぞれ代表者を出し合ってこの企てを実験したのであり、したがって、その効果や意義についてはこの学校の立場からいうと生徒会活動や学校の生徒指導面に反映させ、また少くともこの機会にその反省を報告する義務があるということです。効果があったとすれば特にどのような点であるか。効果がなかったとすればどうしてであるか等、できるだけ詳しくその結果をまとめて、まず生徒会に、また間接的には学校指導部に卒直に飾らずに多数意見や少数意見やあるいは場合によっては個人意見等を発表することがよいと思います。ですから、いつか話しがあった合同ホームルーム記録感想集を作るとは結構ですが、それを参加者だけの記念物のように考えたり、取り扱ったりすることはどうかと思います。勿論そういうプリント集を作るとは自由ですが、その前にまず以上に言ったような趣旨での一種の報告を済ませてからのことにしたいと思います。またうまくいけば、その記念レポートがそのまま生徒会や学校への報告となることは差支えないでしょう。若き日のあるひとこまの「想い出」として参加したり諸君だけの記念物になるのであれば、この企ての意義を認めた両校の発展に対して何のプラスにもならず、それこそ一年梅組のあの級愛や学校への熱意を裏切ることになるのではないのでしょうか。

今後の方向ということになると、最早現在の私には、差出がましい口をきく資格はありません

ん。どうか、森本（山脇）、大和田、石田諸先生の御指導にしたがって、それこそ「暴走」しないように気をつけて下さい。ただ一つだけ私の特に感じたことを付記します。それは、この企てだけではありませんが、何か一つの事をホームルームで決めた場合、討論の時間が少いように思えます。時によると、その場の雰囲気や友情ムードなどで決めがちで後になって足並みが揃わないことが起こりがちです。そして特に少数意見にはもっと寛容であってほしい、少数意見が出しやすいムードを作ることが大切です。

梅組は実に団結的な仲のよい級でしたが、しかし中には級の楽しそうな雰囲気に反対することに遠慮して言いたいこともひかえている人々がいないとはいえません。ですからむしろそのような人々にこそ大いに発言させて、これ以上議論することは無用だということまで、とことんまで意見を出し尽くして決めることが大切でその時はじめて真の多数決は成立するし、心のわだかまりもなくなるのです。殊に合同H・Rのような重大なことを決める場合は一部の筋の通った反対意見を大いに尊重してあげなければなりません。そして、根本的なこと、例えば合同H・R何のために必要か、というような事をとことんまであらかじめ話し合っておきたいと存じます。

2. 合同H・Rが開かれるまで

貝 沼 喜 兵（駒場1年4組 担任）

H・R活動の計画を立てる際、H・Rを5班に分け、各班で責任を持って、数時間ずつのH・Rを分担することに決めた。その班活動の一環として、ある班から女子校と合同H・Rを開きたい。相手校として本校と比較的共通性を持ったお茶の水女子大付属1年を選びたい、担任の力で何とか実施できるようにして欲しいという申し出があった。生徒の意識の底流に男女共学に対して引かれるものを持っていることはわかっていた。又心理学的にも青年期の男女が別学でいるのは、お互いに偶像し、又偏見を持つ傾向があり好ましくないと考えていたので、担任としては実施には賛成であった。一応H・R委員会に申し入れ了解をとり、特に、校長に相談してみたところ、「男女共学にできない現在女生徒と話したいという生徒の要求を是非実現できるよう努力してくれ」と逆にハッパをかけられた。そこで、さっそくお茶大付属高校の生徒部の先生に合同H・R開催の申し入れをした。

申し込んだ時に提案の理由としてあげたのは、「男女共学が本来の姿であると思うが、両校は別学である。高校生の段階は異性に強い関心を持つ時期であり、このような時期にお互いに話し合うことにより、相互の理解を深め合うのは意義があると思う」という内容であった。このような申し入れに対して、生徒部の先生は大変乗り気で、趣旨は結構だから関係の先生と連絡を取って、教官会議にはかって実施したいから後刻返事するということであった。その後多少の曲折はあったが実施ということになり、相手として1年梅組がきまった。担任の片木先生と合同H・R実施について打ち合せを行なって次の4点の結論を得た。(1) 男女生徒が話し合いにより相互理解をすることは意義がある。(2) 合同H・Rの運営について、両校より数名運営委員を選出し、実施の細目を打ち合せ、担任の了解を得て実施する。(3) 会場はお茶大付属高校にする。(4) 第2回目を実施するかしないかは第1回目の結果をみてきめる。

(1) 合同H・Rの実施とその感想

第1回の合同H・Rは第1学期の期末考査の終わった後の7月14日（木）午後2時～5時にお茶大付属高校で開かれた。出席した生徒は駒場の生徒35名（欠席は剣道部の合宿と重なったため）お茶大付属高校1年梅組全員であった。

会の進行は次のように行なわれた。

- ① 開催の挨拶（2階合併教室）
- ② グループ討議（各教室にわかれて）
- ③ 全体で報告および反省会（合併教室）

④ コーラスの交換

各グループは男子5～6名、女子7～8名、1グループは12～14名であり、5グループに分かれて話し合いを行なった。この時間は大体2時間程度であった。その後又合併教室に集まり、各グループで話し合った内容の要約と反省を世話係から報告された。最後にコーラスの交換を行なって散会した。

次にいろいろなグループの間の話し合いの空気や内容について得た印象と感想を述べてみたい。特に印象に残っていたのは「社会生活における男女の役割」について話し合っていたグループで、女生徒は「社会に出て働いてみたいという気持はあるが、結婚して子供を育てることを考えてみると、子供を保育所にあずけてまでも仕事をしたいという気持はない。自分の子供は自分の手で育てたい。」と一致した意見をのべていた。大変、しっかりした母親達に育てられた幸福な生徒達であり、又、極めて、現実的な考えを持っているのに感心した。

感想はいろいろあるが、簡条書きにまとめてみると、次のようであった。

(1) 事前にテーマを決めてなかったので、話し合いの主題をみつけるのに時間を浪費していたグループがあった。(2) 人数が多すぎたので、(12～14名)話し合いがスムーズに回転しないし、又、発言者が固定する傾向があった。(3) テーマの選択が適切でなく、固すぎて、準備不足と重なり処理に困まり、女生徒はたいくつしていた。(4) 男生徒は男生徒だけという具合に同性間のゴソゴソが目立つ、司会者はもう少し工夫して話題の焦点をしぼるべきだ。

総じて、第1回目は成功とは言えないものであった。しかし、初めての経験であり、皆初対面であり、相手は異性なので、とまどうのは当然であろう。生徒は会のあとの委員の反省会でも、この点を認め、準備の不十分と合わせて、決して満足すべきものではないが、全面的失敗であるとは見ない。話し合いの過程で聞いてみたいことは大体聞けた。お互いに偏見があることがわかった。この点において有意義であったなどと話し合い分かれた。

この第1回の反省を土台に次回はもっと有意義なものにしたいという意見を大半の者が了解していたようだ。一般の駒場の生徒は、会の様子が多少お通夜の様相があったので、その責任は自分達にあるのを棚に上げて、期待を裏切られたという勝手な感想を持ったようだ。

いろいろな意見はあったが、第2回を11月に、第3回を1月にそして第4回を3月に持った。第2回と第3回は省略して、第4回目は第3回目と同じメンバーでグループ討論を行なった。その理由は毎回メンバーの変るのは毎回初対面的要素があり好ましくない。又、第3回目に次回のテーマをあらかじめ決めておいて、その間十分そのテーマについて各自勉強してきて話し合いの質を向上させることができるからである。具体的に例をあげてみると、夏目漱石の「こころ」を読んできて、互いにその感想を話し合うグループ、毎日新聞連載の「女子学生亡国論」を読んできてその主題について話し合うなどであった。第4回目は以上のように各グループ間で話し合うテーマが決まっているし、又その内容について皆かなり理解していたので質的に高い話し合いが行なわれた。共通の対象について男女間の考え方の差がかなりはっきりしているの、大変興味があった。特に女生徒の感想に「女性があまり関心を持っていない事柄について男子は実に深く考えているのに驚いた」というのがあった。

合同H・Rについて、お茶大・駒場の両方にいろいろな批判があった。その主なものをあげると次の通りである。

- (1) 基礎になるH・Rの活動が十分でなく、その成果が上っていないのに合同H・Rは時期尚早である。
- (2) 合同H・Rは本質的な話し合いを避け、とりとめのない話題を話し合う単なるお遊びである。

(3) 合同H・Rを単なる興味本位に捕えており相互理解に関心を持っていない。などである。

いろいろな批判はあったが、合同H・Rはいつも出席率80%以上であり、欠席者の中には不心得者もいたが、大半はクラブ活動の為などであり、この点では申分ないと思っている。しかし両校の生徒とも、せっかく4回まで開いた会を、もう少し熱意を持って積み重ね方式で持ち方を工夫してほしかった。なお実行委員会で何回となく会合を重ね真面目に悩み努力して合同H・Rをよくしていこうという熱意を十分理解していなかったようだ。この点担任の指導力の不足も反省している。

3. おわりに

いずれにしても画期的な試みであり、かつすべて生徒の自主的な計画と運営で実施されてきた前後4回合同H・Rの経験はH・R活動の記録として、又、今後このような試みを計画するであろう後輩への羅針盤として報告書をまとめてはどうかと提案したところ、皆の了解と協力を得て、又志賀君と林君の努力によって完成をみたのは大変喜ばしいことである。諸君の協力と両君の努力に感謝する。

資料 1

合同ホーム・ルームにおける生徒の自主的な活動の経過

月 日	会 の 性 格 (会場)	討 議 の 内 容	出 席 者
6月25日	駒 場 H・R	合同H・R開催決定	駒場2—4全員
7月 7日	合同H・R委員会(実行委員会)お茶の水	合同H・Rの持ち方(主として進行など)	両校の委員
7月14日	実行委員会(お茶の水)	会場、進行等についての打合せ	両校の委員
7月15日	第1回合同H・R(お茶の水)	5班に分れて話し合い	両校の生徒・教師
10月 9日	実行委員会(お茶の水)	第1回の反省に基づいて第2回を行なうか否か、やるとしたらその内容は	両校の委員
11月 9日	実行委員会(お茶の水)	委員会の決定事項をクラスにもどし討議した結果の連絡話題の選定について	〃
11月13日	〃 (駒場)	前回の話題をクラス討議にかけた結果の連絡	〃
11月16日	〃 (お茶の水)	班における話し合いの話題の選定について	〃
11月17日	〃 (〃)	話題によって班の編成をする班の構成	〃
11月19日	〃 (〃)	第2回合同H・Rの打ち合せ	〃
11月20日	第2回合同H・R	10班に分れてそれぞれの話題について話し合う	両校の生徒・教師
11月27日	実行委員会(お茶の水)	第2回の合同H・Rの各クラスの反省会の報告次回はどうするか、特に合同H・Rの意義をどうするかについて討論	両校の委員
12月 4日	〃 (〃)	合同H・R経読か否かのアンケートについての検討	〃
12月23日	〃 (〃)	合同H・R全般についての再検討、特に目的(意義)、会の形式等について検討	〃

1月 9日	実行委員会（お茶の水）	アンケートの集計に基づいて班構成討論の仕方などを話し合う。	両校の委員
1月22日	〃（ 〃 ）	班編成になって(a)1つの話題について深く話し合う(b)広く浅く話し合うの2種に分けてそれぞれ話題をきめる	〃
1月29日	第3回合同H・R（お茶の水）	あらかじめ定められているテーマについて話し合う	両校の生徒・教師
2月 7日	実行委員会（お茶の水）	第3回の反省会について次回をどうするか特に日程など	両校の委員
2月24日	〃（ 〃 ）	班の構成，班長会議の打ち合せなど	〃
2月26日	班長会議（ 〃 ）	両校班長による第4回の準備報告会について	両校の委員及び班長
3月15日	実行委員会（ 〃 ）	各班の会場プログラムなどについて	〃
3月18日	第4回合同H・R	第3回と同じメンバー定められたテーマについて話し合うその後報告会	両校の生徒・教師
3月23日	委員・班長会議	第4回の反省会，報告会について	委員・班長
4月	H・R	報告書作成およびその委員をきめる	2—4 H・R
7月18日	磐梯青年の家H・R活動	報告書完成配布	

資料 2

合同ホーム・ルームで話し合われたテーマ

第1回合同ホーム・ルーム 7月15日（1.30～4.00） 5班に分れて話し合う。

- 1班 男女交際のあり方，生徒活動について，読書について
- 2〃 〃 クラブ活動について，
- 3〃 男女共学について，現在の時点における男女平等について
- 4〃 友人関係，社会生活における男女の役割（良妻賢母・女子の職業について）
- 5〃 男女共学について，制服，クラブ活動について

第2回合同ホーム・ルーム 11月20日（2.00～5.00） 10班に分れて話し合う。

- 1班 流行の本質，その他 エレキ，服装雑談，社会情勢等について
- 2〃 〃 その他 女子の大学について
- 3〃 〃 その他 エレキ，服装，ベルト 高校生活について
- 4〃 男女の差 その他 音楽室でピアノを中心に歌を唄う。
- 5〃 将来の進路 〃
- 6〃 〃 特に女性の職業と育児との関係
- 7〃 〃 文化祭に対する考え方
- 8〃 高校生としての読書のあり方について，制服について
- 9〃 〃 社会問題
- 10〃 西洋文学について，学校生活について，雑談

第3回合同ホーム・ルーム 1月29日（土）・（2.00～5.00） 8班に分れて話し合う

- 1班 高校生活について，特にクラブ活動への所属と活動性
- 2〃 教育について，義務教育，教育課程，教育政策，教師について

- 3班 虚栄心とおしゃれについて 合同ホーム・ルームの在り方, 友情
- 4ク キリスト教について, 両校の学校の特色について音楽について
- 5ク 高校生の悩みについて, 期待される人間像, 私の時間
- 6ク 趣味について, 雑談
- 7ク 遊びについて, (学校内における遊び, どんな映画をみるか)
女子の大学に行く理由について
- 8ク エレキについて, 流行, 高校生活, 原高連について, ホーム・ルーム, 期待される人間像

第4回合同ホーム・ルーム 3月18日 (1.00~4.00話し合い) 8班に分れ第3回と同じ
(4.00~5.00報告会) メンバーで話し合う。

- 1班 理想の男性像, 女性像, 将来なりたい職業1人ずつ考えをのべて, ついで一般論に入る
- 2ク ガーナの革命について, 合同ホーム・ルームをふり返って, 女子の大学教育について
- 3ク 夏目漱石の“心”の読後感について話し合う。
- 4ク 理想, 音楽, 旅(旅の経験など)について話し合う。
- 5ク 男女交際について, 源義経について,
- 6ク 高校の授業について(つまらない授業の原因追求)
- 7ク テレビについて, 法律, 男女平等, 友情など雑談調
- 8ク “女子学生亡国論”の感想を話し合う。

資料 3

合同ホーム・ルームに対する女子の感想例

駒場の生徒の編集した報告書には, 駒場中心でお茶大附属高校梅組の感想が十分反映されていない心配がある。合同ホーム・ルームの終了後, 有意義であったか, なかったか, 又その感想を自由に書いて貰った中から代表的なものを抜き出してみた。

(1) 意義がなかった。(なんら得るところなし)

〔A子〕 おもしろくなかった。相手も自分も話す意志もないのに, ただ時間をつぶしていたようだった。それに私は, 1~3回はちゃんと出席し, 4回目には, 報告会の時だけでたが, その間に, 何も見つけだせなかったし, 相手方も話したくなさそうな顔をしていたし, 非常に不愉快なものだった。今後一切このようなことはやりたくない。

(班を構成して班別に話し合うので不幸な組合せの班においてはこのような感想もでる。駒場も同じようである。しかしその割合は両校で4~5名)

〔B子〕 不十分であった。目的は男女相互理解であると思うが, このような会で, しかも, たった4回だけでは少し無理と思う。

友達同士でもなかなかできないのだから理解といっても限度があるが, もう少し回数が多かったらよかったのではないかと思う。

(意義なしとする理由としてこのような理由は割合に多い)

〔C子〕 全然知らない人と意見の交換をするなどということは無理なことだと思う。私自身本当の意見をいわず, 相手にわざと逆らおうとしたりしてしまった。いちおう議題は決っていたが, 話しして発展がなくすぐとぎれてしまった。私としては今は合同ホーム・ルームから得るものはないと思う。協力しなかったことを反省しております。でもいいかげんに協力したまねをするよりもよいと思ったからです。

(2) 有意義であった。(なんらかのプラスになった)

〔D子〕 合同ホーム・ルームをこうして終ってみて別に強く心に残ったこと、印象深かったことはありません。でもやはり心のすみではやってよかったという声が出ます。私達と全く異なった考え方をする人がいるんだということ、そして色々な人がいるんだということ、あらためて思い知らされたという気がするのです。たとえ、今別になんとも思わないにしてもこれからの私の生活において、何かしら影響し、考え方を交えるかも知れません。意義、意義と目先のことばかり追って失敗成功を結論づけるのはまだ早いと思います。

(この感想も割合に多い)

〔E子〕 合同ホーム・ルームの目的は、男女の相互理解、偏見の是正にあったと思うが、私達が経験した手段においてそれを十分に果すには限界があり、また完全にいかなかったと思う。しかしそれは表面的なもので満足しなければならないと思います。ですから男女それぞれの相互の学校に対する偏見を少しでも改められたらよいのではないか。

(一部)

〔F子〕 意義は同じ年代の男子の考え方をそして男子のいる雰囲気を知るところにあると思います。高校時代女だけで過すというのは女子の特性をのぼすなど得るところが多いと思います。しかし三年間の間、男子の考え方を全然知らずに過すというのは不自然なことです。(特に高校時代は男女の特徴というものが打ち出されるともいわれていますから。)

(かなり多い意見)

〔G子〕 意義目的について思ったこと、思っていること。初めはっきりした意義目的は持っていなかったが、やって感じた意義は、1つの題について皆んなで考え、話し合うことであった。私達のホーム・ルームでは一応話し合うけれど、今度の合同ホーム・ルームで話し合ったようなつっこんだ話し合いはないように思う。委員の方たちの間で、初めに考えられていた「相互理解」とか「偏見の是正」という目的はある程度達せられたと思うが、個人差が大きいと感じる。また駒場の方たちではどうか知らないが、私たちが彼らからいろいろの面で刺激を受けたこともひとつの意義だと思う。

(相互理解以外のプラスの面)

〔H子〕 男子は普通の話題も考え方も私達と大分違っているということがわかったところに合同ホーム・ルームの意義があると思います。駒場ばかりでなく他の学校の人の意見も知りたかったと思いました。

3. お わ り に

合同ホーム・ルームは、昭和40年度7月～3月において、お茶の水女子大附層高校の1年梅組と行われた。

この会は、お茶の水女子大附層高校の教官の好意ある理解によって会議で承認され実施することになった。この実施については担任の片木先生のみならず御尽力があった。4回ともお茶の水附層大で行なったが、大勢の生徒が押しかけ、御迷惑をおかけしたが、担任をはじめ生徒部の先生はいつも出席され各班をまわり話し合いの御指導、実行委員会の助言をして下さった。

またこの発表についてはご理解ある態度をお示し下され感謝にたえません。

この報告書をつくるにあたって、お茶の水大附層高校の合同H・R実行委員の久枝万里子さんは前後4回の合同H・Rの記録ならびにたびたび開かれた実行委員会の正確な記録をのこされており、それがこの発表を正確なものにするのに大いに、役立ったことを記して感謝の意を表します。